

今年創立91年目を迎え、「笠工(かさこう)」の愛称で親しまれている岐阜県立岐阜工業高等学校。同校デザイン工学科の3年生が、4月11日に開校した「岐阜県立羽島特別支援学校」の校章とスクールバスのデザインをされました。

校章をデザインした伊吹ひかるさんは、「小・中・高等部の“人”を丸形で表し、自然で安心感のある緑、活力をイメージした赤、木曾川と長良川の青」で配色されました。また、スクールバスをデザインした児玉優香さんは「清流スピリットと小・中・高等部を表した三角形を、川の流れのようなゆるい

曲線と色」で、高木未来さんは「さわやかな水色ラインのなだらかに流れる川に、四角、丸、三角」を配置し、山田朋美さんは「先を見通すレンコンや花火を連想させる花柄に、人との和や知恵の輪を表したリング」で思いを表現されました。

羽島特別支援学校は、障がいの程度に応じて一人ひとりが「地域に貢献できる力」の育成に取り組めます。

両校の生徒の交流、そして私たちの地域の学校に通う子どもたちと交流できることが楽しみです。



年齢や性別に関係なく一丸となって共に学びあってほしいとの思いが込められた校章



自立力、共生力、自己実現力をイメージしたスクールバス

かきまつの民話「昔むかし」

かせくりり ⑤

「年貢をまけてもらおうと思  
って、地主様のところへ行  
って来たが、まったくらち  
があかなんた。」

「十二俵も納めたら八俵しか  
残らへんし、借金をはらえ  
ば春までしかもたんねえ。」  
「地主様に、また、米を借り  
るよりしようがないやろう  
ねえ。」

「去年のように、港でとびの  
仕事があるとよいのだが……  
……。今年是不作やった  
で、みんなやりたがったる  
しなあ。」

「かせの銭は、月末までには  
二、三円にはなるやろうけ  
ど、年こしのたしににかな  
らんしねえ……。」

二人に話を聞いていた、ふさの  
胸に、あてんまりの姿が消え  
たりうかんざりしていた。そし  
て、心なしか、かせくりをする  
手にも力がいらなかった。

ふさの家は、わずかな土地  
を借りて米を作る小作農であ

った。そのため、とれた米の  
半分以上は、年貢として地主  
に納めなければならなかった。  
それで、いつも今ごろになる  
と、父は笠松の港でとびの仕  
事をするのであった。

とびの仕事というのは、木  
曾川を下ってきた材木の上に  
乗って、いかだをほどき岸へ  
寄せる仕事である。この仕事  
は、重労働の上にとても危険  
であった。しかし、一日の賃  
金が一円五十銭から二円ほど  
になったので、少しでもくら  
しのたしにするため、働きに  
でたのである。

冬休みになると、ふさは朝  
からかせくりをするようにな  
った。そのため、今まで三日  
かかって三十杵仕上げたのが、  
一日でできるようになった。  
ふさは、腰が痛くなるものが  
まんしてすわり続けた。

(つづく)